

---

## 研究ノート

---

# 初年次教育におけるアクティブ・ラーニング PBL 体験

## Active Learning (PBL) as a First-Year Experience at Tama University

石川 晴子\*      ○中村 その子\* (○研究代表者)  
Haruko ISHIKAWA      Sonoko NAKAMURA

**Keywords :** active learning, first-year experience, PBL, NPO-academia collaboration

### 1. はじめに

多摩大学経営情報学部では、2009 年度から、1 年生の初年次教育・導入科目としてプレゼミ I (春学期) プレゼミ II (秋学期) を開始した。15 人程度の学生を原則一人の教員が担当してゼミ形式で授業を行い、大学教育への円滑な導入と仲間づくり、そのあとの大学での人間的な成長を促す基礎を作ることを目的としている。多摩大学では、大学 1 年生を「社会人マイナス 4 年生」とであるととらえ、学生たちの大学 4 年間のミッションは、社会から要求されるものを身につけることであると定めている。「社会から求められるもの」を総称して「問題解決力」と定義付け、講義だけでは達成できないその力の養成のために、「ゼミ形式による学び」を用いている。1 年生のプレゼミ I、II は、その「ゼミ」という学びのスタイルの導入を行う科目である。

2000 年代に入って、特に大学での初年次教育の重要性が認識されるようになり、多くの大学がその位置づけを明確にし、その策定と拡充を図っている。<sup>1</sup> 大学新 1 年生を新たな目標に向かってソフトランディングさせ、これからの勉強の意義と展望、そして将来のキャリア育成への道筋をはっきりと自覚させるための初年次教育はどのようなものであろうか。

大学初年次教育の目的は、大学で学ぶことの動機付け、学力の基礎固め、スタディースキルの習得、離学防止、友達づくりの場の提供、など多岐にわたっており、その科目設定や策定、教育手法、シラバスなども大学によって様々である。多摩大学では、初年次教育の重要な要素として「受動的な学習態度から脱却し、自分から能動的に行動して社会の問題を発見し解決していく学習態度を身につける」ためのアクティブ・ラーニング手法を多く取り入れた。初年次

---

\* 多摩大学経営情報学部 School of Management and Information Sciences, Tama University

<sup>1</sup> 文部科学省は初年次教育を「高等学校から大学への円滑な移行を図り、大学での学問的・社会的な諸条件を成功させるべく、主として大学新入生を対象に作られた総合的教育プログラム。高等学校までに習得しておくべき基礎学力の補完を目的とする補習教育とは異なり、新入生に最初に提供されることが強く意識されたもの」と定義している。

教育が、高校教育で足りなかったものを補い大学教育に備える、という単なるイントロダクションではなく、新たな知的刺激に富み、人生の節目での新しい扉を開き、学生にとって将来のゴールをわかりやすく見せるものでなければならないと考えるからである。従って、プレゼミ I、プレゼミ II は、アクティブ・ラーニング要素を重要視する少人数ゼミ形式の初年次教育科目と位置付けられることになる。本稿では、そこでの 2018 年度秋学期のプレゼミ II の中の 1 クラス 13 名で著者が行った教育実践を考察する。以下アクティブ・ラーニングを AL と略す。

## 2. AL 手法と先行研究

文部科学省中央教育審議会では AL（または主体的・対話的で深い学び）を「教員による一方向的な講義形式の教育とは異なり、学修者の能動的な学修への参加を取り入れた教授・学習法の総称。学修者が能動的に学修することによって、認知的、倫理的、社会的能力、教養、知識、経験を含めた汎用的能力の育成を図る。」としているが、一口に AL と言ってもその内容や手法、そして「能動的な度合い」とでもいうべきものは様々である。授業内での知識確認クイズやクリッカー使用から、自（他）己紹介などのインタビュー、ミニッツペーパー、ワークシートなどを通した教員と学生の交流、学生同士の教え合い、種々の形式のディスカッション、ロール・プレイ、ケース・スタディー、ポスターセッションやプレゼンテーション、PBL まで、学生が一人で紙に書くものから実際に外部の組織と連携しての活動まで、その振り幅はかなり広い。<sup>2</sup>

そのような中で、初年次教育にも様々な AL 手法が取り入れられてきているが、今回本稿で中心的に扱う初年次教育への PBL 導入の試みも近年その数を増やしつつある。多くの場合、初年次 PBL の導入は、演習科目や何らかの実習、体験を伴う科目、社会人育成や地域連携プログラム、PBL 自体を行うことを目的として設定された科目で行われ、大学入学後、学生が新鮮な気持ちを持っているうちに、大きな刺激としての PBL という AL 体験をさせることにより、その後の大学での主体的行動の動機付け、課題の解決や目標の達成の実体験、将来のキャリア形成への自覚などをうながす目的で行われている。

軈大輔（2018）では演習における地域密着型 PBL 導入事例および、（1）チューター制の導入、（2）教員主導によるプロジェクトマネジメント、（3）課題内容の限定化、（4）連携先への複数回の訪問要請という仮説の検証を行っているが、初年次での PBL 企業連携は、企業が「大学に問題解決を委託」するスタンスではなく問題を解決する学生を支援し、ともに解決に取り組むというスタンスが必要であると述べている。これは、他の研究者も指摘していることであるが、連携先の企業とのすれ違いを避けて初年次 PBL を成功させるための重要な要件であると考えられる。

水野英雄（2017）は社会人力育成という観点から、初年次教育に地域産学連携 PBL を導入し、

<sup>2</sup> 東京大学大学院総合文化研究科教養学部付属教養教育高度化機構アクティブ・ラーニング部門は、そのホームページにて +15 minutes という PDF 資料を公開している。そこでは、授業をスムーズに始めるための手法、ディスカッションの手法、学生同士の教え合い・学びあいの手法、振り返りの手法、105 分だからできる活動、の 5 つに分類された約 30 の手法が紹介されている。

社会人基礎力<sup>3</sup>を構成する3つの能力からの考察を行っている。この活動は、身近にあるデパ地下調査とマップ作成が、2年次以降の商品開発へつながり、先輩である社員の方々の活躍を知ることになり、オープンキャンパスでの報告会を行うことに展開しているが、このような有機的なPBLの展開も注目に値する。榎本、勝田、児島（2009）でも社会人基礎力を意識しながらの1年生科目へのPBL導入を考察しているが、模造紙プレゼンテーションの作成や自校PRを入りやすいテーマとして設定している。PBLを、1年生の大学最初の（研究）発表の場に結び付けることもまた有効な方法であろう。

また、初年次にPBLを導入することについて、学生のレディネスが論議されることも多い。中山留美子（2013）は、学生の自己学習と少人数グループ学習、問題解決という過程を経た学習、事例シナリオの取り上げ、教員のファシリテーターとしての役割など、PBL教育の6つの基礎要件をあげて、学生のレディネスの把握について述べている。「経験の浅い学生に対して、専門性が高く活動の自由度も高いPBLを展開してしまうと、高い負荷だけがかかり、目標とする学修成果が得られないということにもなりかねない」と述べているように、一口にPBLと言ってもどのように、どんな形で導入するか、というプログラムの準備と構成も教員が向き合っていかなければならない課題である。

### 3. 授業運営の枠組み

2018年度のプレゼミⅠおよびⅡの授業計画および、著者がクラスに導入したAL手法は概略以下ようになる。

表1 コンテンツとAL手法のまとめ

プレゼミⅠ	コンテンツ（学習指導は随時）	使用される主なAL手法例
4月	時間割履修説明、アイスブレイキング、親睦のためのスポーツフェスティバル	自・他己紹介、Ball-toss
5月	図書館利用、資料検索、調べ学習、簡単な発表、読書感想文提出	背景知識の調査、クイズ、Think Pair Share、Buzz Groups
6月	自分の将来の志を設定する、学生手帳の利用	ミニッツペーパー、ワークシート
7月	期末試験、レポート対策	相互教授法
プレゼミⅡ		
9月10月	リサーチ発表準備・2年生からのホームゼミ選択オリエンテーションと準備、学園祭参加準備	ディスカッション、ロール・プレイ プレゼンテーション
11月	リサーチ発表準備、ホームゼミ選択、学園祭参加	PBL、Affinity Grouping、ディスカッション、プレゼンテーション
12月	リサーチ発表準備および発表	PBL、ケース・スタディー、ポスターセッション
1月	リサーチ発表やこれまでの学習の振り返りとまとめ、期末試験準備、春休みの計画作成	ワールドカフェ（導入）

<sup>3</sup> 2006年に経済産業省から提唱されたもので、「前に踏み出す力」「考え抜く力」「チームで働く力」の3つの能力およびその細分化された12の能力要素から構成されている。

プレゼミで AL 手法を網羅的に行うことは難しいので、上記のように 4 月の導入段階から 1 月の総まとめまでコンテンツにふさわしいと思われるものを段階的に取り入れた。その最終段階として行ったのが AL の比較的高次に位置する PBL——外部の組織と連携して実際に商品開発をし、その結果を大学の主催するアクティブ・ラーニング発表祭<sup>4</sup>でプレゼンテーションする——である。

大学の中だけの AL に終わるのではなく、実際に社会で活動をしている組織、社会人と連携して活動することは、1 年生に、社会人と関わるという新鮮な体験を与え、社会で働くということはどういうことなのかを知り、2 年生以降の大学での能動的な学びの形に踏み出す貴重な動機づけの場になると考える。さらに、学生は、そのプロセスで学習用に演出したのではない本当の問題解決の場面に遭遇する可能性も高く、一方、連携した組織、社会人は学生の意見や感じ方に直接触れる機会になるため、双方にとって有意義なシナジー効果も期待できるであろう。年度を通してのコンテンツを説明することは紙面の関係で控え、最終段階の PBL について以下記述する。

#### 4. PBL の具体的な実行過程

今回のプロジェクトの授業進行および各段階の意義は以下のようなものである。

まず、今回の PBL で連携した法人について説明する。「福祉法人時の会」は多摩市を中心に活動する福祉法人である（理事長 岡崎和子氏）。「働く場」「生活の場」「家族支援の場」を三つの柱とし、ライフステージを通した一貫した支援を目指す、という法人理念のもと、ぐりーんぴーす工房（製菓製造販売）、多摩うどんぼんぼこ（うどん店）、ふぁみりあ（共同生活援助）を運営している。福祉法人としての活動を行うにあたり、地域住民、地域行政や教育機関などの組織との連携も重要視しており、多摩大学のホームゼミ<sup>5</sup>とも 2010 年以来連携活動を行ってきた。今回はぐりーんぴーす工房に、地域の産物を取り入れた新しい焼き菓子の開発にあたって学生のアイデアを取り入れるという目的のもと、本稿 PBL の連携活動に参加して頂くこととなった。以下ぐりーんぴーす工房を工房と略す。

##### 第 1 段階：産学官民連携と PBL、基礎的な商品開発についての講義

大学は学生に授業をするだけでなく、企業や行政、NPO などの組織と連携して多彩な調査・研究・提言・商品開発などを行っていること、大学のゼミ活動ではそのような外部の組織と連携した活動を行うことが重要視されており、ゼミは学生が社会と関わる学びの場であることを、主として多摩大学経営情報学部のゼミ活動の実例を挙げて具体的に説明した。今回はその中でも商品開発を行うので、商品開発の実例やアイデアの着想や展開方法なども話し、それに関連する基礎的なマーケティングの手法についても導入した。

<sup>4</sup> 多摩大学が独自のアクティブ・ラーニングと高大接続を実現するため 2015 年より年 1 回実施している研究報告会。多摩大学では、従来から学生が学外のフィールドに出て活動し、行政・企業・NPO・地域団体・地域住民などのさまざまな関係主体と連携しながら主に地域の問題発見と課題解決を目指すプロジェクトを推進しているが、その活動を、中高生を含む学外の関係者を招いて報告する発表会である。

<sup>5</sup> 多摩大学経営情報学部にて 2 年生以上の学年で行われるゼミナール。1 年次のプレゼミ、2 年次から卒業までのホームゼミで一貫したゼミナール教育を行っている。



商品開発は、1年生にとっては魅力的な分野で、将来の職種として志望する学生も多いように見えるが、表には出ない苦勞も多く、知識と経験、センスも必要なものである。そのため、マーケティングを始めとする商品開発の基礎的な知識や素養を十分に身につけて、高い学年になってからこの種のPBL商品開発を行うのが常道であるかもしれないが、今回はあえて1年生の段階でこれを体験させることにした。大学に入学した新鮮な気持ちがあるうちに、高次のALで負荷をかけて刺激を与え、2年生以降の学修の動機付けにしてはどうかと考えたからである。

低学年での学修と知識・体験の積み上げ、比較的単純なAL手法の導入⇒習得した知識や積み重ねた体験を実際に用いて、高学年時に行う高次のAL(PBL)という道筋ではなく、社会での実際のPBL体験を起爆剤として最初に体験させ、それを基礎的な学修と知識・体験の積み上げに対する動機付けにする、という道筋を作ってみた。言い換えれば、実際の商品開発がそう簡単なものではない、学ばなければならないことが多くあると早い段階で気づかせることによって、これから将来のために基礎的な学修に取り組もうとする気持ちを醸成するという方向である。

## 第2段階：外部組織と商品リサーチ

将来行う「企業研究」を見据え、「福祉法人時の会」の沿革、運営方針、事業展開、および工房の商品ラインナップについて、学生に、主としてインターネット上の情報をリサーチしてまとめさせた。多くの組織(会社)情報はウェブ上に掲載されていることを認識し、それをリサーチ、SWOT分析することによって、ある程度その企業の体質や優劣が見えてくることに気づくことがねらいである。今回は特に、ソーシャルビジネスや社会起業家を意識し、地域に根差した「福祉法人」という営利活動と福祉活動を両立させた組織の在り方に焦点をあてた。なお、商品開発にあたって必要な分析や調査の手法に関しては、2年生以上の講義で詳しく取り上げられることを考え、項目(自社と他社の商品比較分析、ターゲット設定、消費動向調査、アンケート結果分析など)を挙げるに留めた。

## 第3段階：工房からのミッション

1年生に白紙から商品開発させることは難しいと考えたため、(1)運営方針の尊重(人にやさしい素材を使う。無添加)(2)地域の産物を使う(3)コストを意識し工房にすでにある設備で製造可能なもの、という方針のもと、多摩の名産であるブルーベリーの自家製ジャムを使ったマドレーヌを新商品として開発することとし、まずはたたき台となる第1試作品を工房にて制作し、学生が試食するところから始めた。

## 第4段階：第1試作品 学生試食フィードバック提案

第1試作品は工房の自家製ジャムを5ミリ程度の粒状にして生地になでて焼き上げたものとなった。形はマドレーヌとしてオーソドックスなシェル型にし、学生は3人程度のグループ5つに分かれて試食した。その味についてディスカッションしてリーダーが意見(意)と提案(提)をまとめてグループごとに発表を行った。以下に抜粋してまとめる。また、授業の最後に、個人でも意見と提案をリアクションペーパーにまとめ、教員に提出した。

(意1) ジャムが入っているということを視認できることがこの商品の特徴につながる

- (意2) ジャムと生地との配合バランスが重要な要素だが、今一つブルーベリーの味が感じられない
- (意3) 食べやすい大きさでさっぱりとした感じ
- (意4) ジャム片のちらばりに偏りが出ているように見える
- (提1) ブルーベリーの味をより強く出すため、もっとジャム片を大きくしてマドレーヌに混ぜ込んでみてはどうか（どのグループの提案もほぼこれに集約）

提案は、工房に伺って学生がプレゼンテーションすることが理想だと考えたが、工房にはプレゼンテーションを行うスペースがなく、職員の方が大学に来る時間を取ることも難しかったため、提案説明文書と提案パワーポイント資料を印刷したものを教員が工房に届ける形にした。

#### 第5段階：第2試作品完成 学生試食フィードバック提案

提案を受けて、ジャム片を15ミリ程度にしてマドレーヌの生地に練り込んだ第2試作品が完成した。確かに味は濃くなったのだが、全体の水分が多くなってしまうため、日持ちがしなくなり、ジャム片の水分が包装フィルムについて、見た目がきたなくなってしまうという問題が生じた。また、菓子類は水分が40%以上になると生菓子の範疇になってしまい、賞味期限などの点で店舗では焼き菓子のように扱えなくなるため、味を濃くするために単純にジャムを多くして行くことはできない、という法律上の問題も生じた。

学生はまさに「作り物ではない現実の問題解決」に向きあうことになった。改めて、どのようにこの問題を解決するかについてディスカッションを行った。アイデアを出すためのディスカッションには色々な形式があることを併せて説明し、付箋を用いたワールドカフェ方式を導入した。学生は今までのグループとは違ったメンバーと移動して意見交換をすることに、最初は少し戸惑っているように見えたが、これまでより新しい意見が積極的に出るようになった。その結果出た解決策提案は以下の通り。学生は大変熱心に討議を行って提案したのだが、提案送付後、工房から矢印で示したような問題点が指摘された。

- (提1) 形を台形にして、ジャムをサンドイッチ状にしてはさむ ⇒ この形はお菓子として「マドレーヌ」ではなく「フィナンシェ」になってしまう
- (提2) 貝の形の溝に沿って、表面にジャムを線状に引いていく ⇒ 透明セロハンの包装の中でこの筋を包装を汚さずにきれいに保つことが技術的に難しい
- (提3) ジャムをマドレーヌの上に乗せる ⇒ 上に同じ
- (提4) ジャムをマドレーヌの中に入れる ⇒ 技術的に難しい上に、生菓子の範疇に入ってしまう恐れがあり
- (提5) 棒状にする ⇒ 良い案であり技術的には可能だが、折れないように包装するのに紙の容器などに入れるとコストが上昇

#### 第6段階：第3試作品完成 学生試食フィードバック提案

上記を受けてのリアクションペーパーでは、工房からのフィードバックを受けて、かなりがっかりし、商品開発がそう簡単ではないことを実感した学生の感想が多く見られたが、これはPBLという観点から見れば、非常に貴重な失敗からの立ち上がり体験であると考えられる。教室では、ここまでのプロセスを冷静に振り返るため、主としてペアワークでより現実的な解決

策提案を考える形を取り、教員がそれぞれのグループとリラックスした雰囲気です話をするようにした。その結果出た提案は以下の通りである。

(提 a) 形はマドレーヌのシェル型で、日持ちをよくし、生菓子になってしまわないように、ジャムをうすく挟んでサンドイッチ状にする。ジャムの量が少なくても食べている間ずっとジャムと生地が一緒に口に入るため、最後まで味をしっかりと感じるができる

(提 b) マドレーヌには何も入れず、ジャムを小さい別容器に入れて添え、食べる時に付けて食べる

別容器に入れて添える案は、保存料使用の問題や容器コストの問題で実現が難しいという理由から、(提 a) 案が採用された。

#### **第7段階：仮の最終案完成 これまでのプロセスを研究発表にまとめる**

仮の最終案はマドレーヌのシェル型で、サンドイッチ状にブルーベリージャムを挟んだ形となった。学生はこれまでのプロセスをプレゼンテーションするパワーポイントスライドの作成を行った。授業では、パワーポイントの基本的な使い方を導入したが、高校時代にパワーポイントを学んだ学生がそうでない学生に教える、という「ALの学生同士の教え合い」が期せずして教室内で展開することになったことは興味深い。下記第8段階の予行演習として学園祭でのポスターセッションとプレゼンテーションの予行演習を行った。

#### **第8段階：多摩大学経営情報学部 アクティブ・ラーニング祭にて研究発表**

教室内で、教員と同じクラスの学生の前でプレゼンテーションすることも学生にとっては重要な体験であるが、研究発表会という場で、クラスメイトではない一般の方々に前にプレゼンテーションを行い、同時に他の学生の研究発表を見る、という体験はALの外部への発信行動と自らの学習の振り返りという意味で、学生には大きな能動的刺激となると考えられる。なお、発表後、このPBL活動について新聞社の取材を受けたが<sup>6</sup>、その経験も学生には、新鮮な経験となったようであった。

#### **第9段階：学生の工房見学と従業員の方との直接対話、フィールドワーク体験**

最後に、学生は工房店舗の見学に行き、従業員の方から、店舗および商品の説明、事業展開、マドレーヌ制作販売で予想される利点や問題点などを直接聞く機会を持った。実際の店舗や商品配列見学（フィールドワーク体験）、自分たちにミッションを出してくれた従業員（社会人）との直接対話と研究発表会の報告、実際に製品を焼いている現場を見る（現場見学）もPBLにおいては重要な要素であると考えられる。

### **5. まとめ**

今回、初年次教育、中でも少人数でALを中心とした多摩大学独自のゼミ教育をするプレゼミという授業の中で、実際に地域の組織と連携して商品開発体験を行い、研究発表を行った。

<sup>6</sup> 読売新聞 2018年12月9日付け 多摩版

実際の商品開発を行うのに必要な知識や経験がまだ少ない中で、あえて1年生にPBLを「先行体験」させることによって、以降の大学での学びのある種の起爆剤にできるかが命題であったが、学生の反応（後述）を見ると、ある程度の成功を見たと考えられる。

まず、商品開発そのものは非常に初歩的なもので、教員が準備してルールを敷いた部分もあり、本格的な産学連携商品開発とは言えなかったかもしれない。しかしながら学生は、常に積極的に授業に参加して多くの知識と体験を習得し、初めて体験する研究発表に至るまで自分たちの学習の成果を出そうと努力していた。13人という限られたクラスの中の試みではあったが、初年次教育としてPBLを行ったことに、大きな戸惑いを感じたり、消化不良を起こしたりする様子は見られなかった。

次に、自分たちとしては努力して良い提案をしたつもりでも、製造の技術的な面、コスト、法規制、作ってみて初めてわかる包装や日持ちの点など、問題が実際に持ち上がり、それを本当に解決していくプロセスが効果的な学びの場になったのではないかと考える。また地域に根差した組織がこのPBLに深い共感と理解をもって、協力をしてくれた意義も大変大きい。

以下にリアクションペーパーとして提出された学生の振り返りをまとめる。

- ▶ 問題を一つ一つ解決していく、ということがどういうことなのかを実体験できた。
- ▶ 実際に商品開発をしてみて、生産者面、消費者面、販売者面、衛生管理者面、それぞれの立場があることが理解できた。
- ▶ 自分たちが考案した形が実際に現実となって、感銘を受けるとともに商品開発の難しさを痛感した。
- ▶ 何かを提案したり企画したりするときに、「現場の方たちの声」がとても重要だと感じた。
- ▶ 斬新なアイデアを出すのはなかなか難しいが、他の人が思いつかないようなことに気づいた瞬間はとても充実感を感じた。
- ▶ パワーポイントの技術、問題処理能力がついた。この能力を商品開発だけでなく、他の場面でも生かして行きたい。
- ▶ 提案した商品が却下されてしまったときはショックだったが、将来商品開発に携わるようなことになれば普通のことだと思うので、今の段階でそれを経験できてよかった。
- ▶ 実際に商品開発をしてみて、商品が完成するまでの大変さや苦勞を学ぶことができた。提案したことに対して、課題がたくさん出たり、ボツになったりと、すべてがうまく行ったわけではないが、提案する力、解決する力は付いたと思う。
- ▶ 自分の案を具体的に表現し、客観的に物事をとらえられるようになった。今回学んだことはこれからのゼミでのプレゼンテーションに生かしていきたい。
- ▶ 今まで作る側に立って商品を考えてことがなかったので新しい視点から商品を考えることができ、今回の学びはとても勉強になりました。
- ▶ ありきたりのアイデアならだれでも考えてしまうことができるので、人より一つ上の提案をして、周りから求められる自分の価値を高めて行きたい。

最後に、2018年度秋学期プレゼミⅡは第9段階までをカバーして終えたが、クラス13人のうち10人が今回の活動と関係の深い、マーケティング系、事業構想系、地域活動系のゼミに進み、4名が「時の会」との連携活動を続け、2019年7月現在開発したマドレーヌの包装デザインを行っている。また3名は大学近隣にある小学校において、地域との連携活動を続けてい



る。具体的には、放課後や休日に開催される多摩市主催の「放課後子ども教室」<sup>7</sup>で、地域住民とともに、安全管理員という立場で参加児童に対して「遊び」の指導や見守りを行っている。彼らの所属するホームゼミでは、「英語であそぼう!」という英語教室プロジェクトを2011年より開始し、学生たちは自ら企画した英語を使ったゲームや遊びを、この放課後子ども教室へ集まる子どもたちに対して定期的に行っている。その他、小学校で行われるPTA、児童館との共催イベント—流しそうめんやハロウインのランタン作り、お祭りなど—にも携わっている。

放課後子ども教室では、どのような子どもが何名参加するかは事前にわからないため、遊びやゲームの企画をする際、参加児童の人数、年齢差、男女差、体格差、場所的な制限、時間制限、安全面での制限など、考慮しなければならない点が多い。単に自分たちが楽しいと思う遊びを提案するだけではうまく行かない。また、実際の活動の場面では子どもたちへ正確に伝わるように指示を出し、子どもたちや地域の大人たちとうまくコミュニケーションをとり、現場での予期せぬ事態にも協力して対応していくことが求められる。このような活動から得られる学びは、本稿で述べられた商品開発PBLを通した学びと共通したものであるが、より実践的、発展的、継続的な段階にあるものと言えるだろう。

1年生の時に商品開発PBLへ参加した学生は、参加しなかった学生に比べると、こういった活動に対してより積極的かつ粘り強い取り組みを見せている。そして、彼らに対する外部からの評価も高い傾向にある。現時点では印象にすぎないが、このことは、PBLを通して得られる「気付き」は、できるだけ早く経験した方が効果的であるということを示唆しているように思える。ある課題に対して、求められる条件をひとつずつクリアしながら、目標へ近づき、結果を出そうと努力する。その過程で自信をつけ、また自分自身の取り組むべき課題や目標を見つけ、日々の学びへ繋げることができる。この流れの中で、本稿で述べたような1年次におけるPBL経験の影響は大変大きいと感じられる。

---

<sup>7</sup> 多摩市は、平成19年度より「多摩市放課後子ども教室事業」を開始した。PTAや地域住民の協力のもとに、放課後や休日に学校施設（校庭、体育館、教室等）を活用して、子どもたちが安全に安心して遊ぶことができる「広場」を提供している。2017年時点で、15教室にて実施している。

## 参考文献

- 榎本達彦・織田勝也・児島秀樹（2009）経済学科におけるプロジェクト体験学習（PBL）導入の試み：その成果と課題 明星大学経済学研究紀要 40(2)、49-63
- 水野英雄（2017）初年次教育における産学連携による社会人基礎力育成—星ヶ丘三越デパ地下マップの作成—（教育実践）『社会とマネジメント』第 14 号、相山女学園大学、77-88
- 中山留美子（2013）アクティブ・ラーナーを育てる能動的学修の推進における PBL 教育の意義と導入の工夫 21 世紀教育フォーラム（8）、13-21
- 梶大輔（2018）大学教育における産学連携型 PBL 実施手法の研究—初年次教育への導入事例とその評価— 商経学叢 64(3)、345-361